6/23 琉球

きょう沖縄「慰霊の日」

命の土地、戦争に使うな

太平洋戦争末期に住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が行われた沖縄戦から77年。沖縄県では23日、「慰霊の日」を迎えました。20万人以上の尊い命を奪い、命の糧の農地を破壊し尽くした沖縄戦で上陸した米軍は住民を収容所に閉じ込め、土地を強制接収して次々と基地を建設しました。基地は沖縄の本土復帰50年を経た現在も県民の命と暮らしを脅かし続けています。（小林哲）

普天間基地に所有地占拠

宮城正雄さん（86）

「戦争のためには一坪の土地も貸さない。使わせない。売らない」―。9歳のとき沖縄戦で父親と生き別れになり、所有地を米軍普天間基地（宜野湾市）に占拠され続けている宜野湾市の宮城正雄さん（86）は、「軍隊は住民を守らない。基地は平和のためではない」と訴え、同基地内の所有地の賃貸借契約を日本政府と結ぶことを拒否しています。

父と生き別れ

1944年3月、旧日本陸軍は第32軍を編成し「国体（天皇絶対の体制）護持」「本土防衛」のため沖縄に配備しました。宮城さんが住んでいた宜野湾村（現・宜野湾市）にも部隊が駐屯しました。

大山地域の宮城さんの実家にも、兵士が寝泊まりするようになり、通っていた学校は徴発され「生徒は追い出され、運動場には戦車が駆け巡り訓練場になっていた」といいます。

米軍は、沖縄本島上陸前から猛烈な艦砲射撃を開始。危険を避け、宮城さんは、父方の曾祖母、両親、兄、弟2人の家族7人で実家から離れた墓所にあった壕（ごう）に避難しました。

45年4月1日、米軍は本島に上陸しました。宮城さんらが避難していた壕はガス攻撃を受けました。家族の命は無事でしたが、「ここにいたら助からない」と、壕から実家近くに移動することにしました。

夜間、父親と5歳の弟、2歳の末の弟を背で縛り付けておぶった宮城さんの4人が先発しましたが4人が農道を進んでいると、約10㍍の至近距離で砲弾が破裂し、「大きな爆発音とともに、破片が火の玉になって、四方八方に飛び散った。真昼のような明るさだった」といいます。

「家畜の中を転んでは起き、必死に逃げようともがいた」―。宮城さんと2人の弟は他の家族と合流できましたが、爆発の衝撃で5歳の弟の手を離してしまった父親は別の方向へ逃げ、行方不明になりました。その後宮城さんたちは実家近くに戻ることができましたが、程なくして米軍に捕まりました。

宮城さんら家族が移送された本島北部の収容所では、食料不足、マラリアのまん延、シラミの大量発生など「生き地獄」が待っていました。合流していた親戚の赤ちゃんが亡くなりました。

すでに基地が

戦後、宮城さんらが宜野湾村に戻ると、街並みや広大な農地は消滅し、すでに普天間基地が横たわっていました。大山地域は焦土化し、実家の家屋は倒壊していました。

宮城さんたちは住民らの「ゆいまーる（助け合い）」で荒れ果てた農地を徐々に復元し、生活を再建していきましたが、小学3年生になった末の弟が米軍機の起こした交通事故で命を奪われました。当時は米軍の圧政下で、事故の補償はなかったといいます。宮城さんは「戦（いくさ）の中、弾の中をくぐって弟を助けたのに」と悔しさをにじませます。

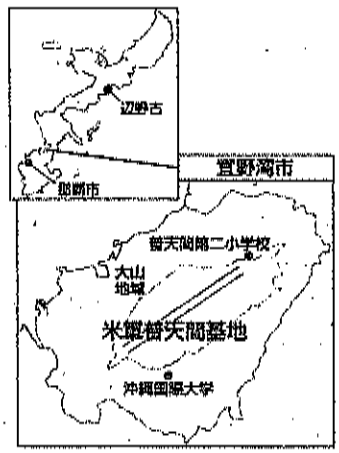
宮城さんの同基地内の土地は、父方の祖父母が戦前に手に入れた農地で、「おじぃ、おばぁが節約し、寝る間も惜しんで働いて築いた、命と暮らしを守るため、子や孫や平和のための財産」だといいます。

宮城さんは戦後、土地の強制接収に反対する「島ぐるみ闘争」（56年）の集会にも参加。「権利と財産を守る軍用地主会」の活動なども行ってきました。本土復帰運動でも奮闘しました。

平和外交こそ

同基地周辺では、2004年に沖縄国際大学構内に米軍ヘリが墜落、17年には普天間第二小学校に米軍ヘリの窓枠が落下、基地由来の人体に有害な有機フッ素化合物PFAS（ピーファス）による水汚染など米軍絡みの事件・事故が相次いでいます。

宮城さんは「普天間基地は百害あって一利なし。返還・撤去以外ない」と訴え、名護市辺野古の米軍新基地建設にも反対。ロシアのウクライナ侵略に乗じた岸田文雄政権の改憲・大軍拡路線は、「絶対に許せない。岸田内閣がこのまま突っ走っていくと、沖縄も戦場にならない保証はない」と強調します。

戦争で犠牲になった「すべての人たちの魂が集約されている憲法9条。この日本の、世界の宝を生かして平和外交を進めてほしい。戦争はいかなる理由があっても絶対反対」―。宮城さんの切なる願いです。

岸田内閣でまた戦場か